

## 高巖先生への謝辞

吉田健一郎 寺本佳苗 田中敬幸 藤野真也 大塚祐一 藤原達也

### 高巖先生への謝辞

麗澤大学経済学部 吉田 健一郎

前々から高先生が麗澤大学を退職されることは聞いていましたが、いざこの日を迎えると寂しさがこみ上げてきます。

わたしはこの後に執筆される寺本先生、田中先生、藤野先生、大塚先生、藤原先生と異なり、大学院は高先生の指導を受けてはいないため、研究分野も異なります。そのため、高巖先生が麗澤大学をご退職されるにあたり、思い出されるのは、①国際経済学部時代の学部のゼミでの学び、そして、②麗澤大学への奉職が決まった時のことです。

わたしが学部在籍していた時代、高先生の専門ゼミナールのテキストは『H.A.サイモン研究—認知科学的意思決定論の構築』でした。非常に難解な内容でしたが、わたしの理解力が不足していた点について、高先生は時間をとってくださり丁寧な説明をしてくださったことを今でも思い出せます。また、1999年に高先生が執筆された『ビジネスエシックス—企業の市場競争力と倫理法令遵守マネジメント・システム』を購入し、当時のゼミ長とともに輪読したことなども、わたしにとっては大きな学びの場であり、そうした環境を整えてくださった高先生には感謝しかありません。

その後、しばらくの間、高先生の大きな接点はありませんでしたが、高先生が経済学部長となり、麗澤大学に縁をいただけたこと、大変な難く思っております。しかし、当時の自分が「麗澤大学に対して期待される成果を残すことができた」と胸をはっていけないこともありました。ビジネスゲームの

アップデート作業などをご一緒できたことはわたしにとって大きな喜びでもありましたし、非常に多くのことを学ばせていただきました。その後も何かと気にかけてくださり、大変救われる思いでした。また、ビジネスゲームという教育コンテンツを起点とした麗澤大学の経営教育はこの時から本格化したのではないのでしょうか。

これからも様々なところでご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い致します。

### 高先生との思い出

麗澤大学経済学部 寺本 佳苗

今は高先生に安心して麗澤大学をご退職なさっていただきたいと思う気持ちと、心細く思う気持ちがないまぜになっています。ここでは高先生との思い出を振り返ることを通じて、高先生に感謝の意を伝えたいと思います。その思い出は、研究室のドアのガラス越しに見える「背中」、意図せず送られた「ご恩」、かけていただいた「言葉」です。

私は外部の大学院修士課程に所属していましたが、さらに深くビジネスエシックスの研究をすべく、高先生の授業に“もぐり”ながら過ごしていました。主には謝辞の執筆メンバーや山本実氏（現宮崎産業経営大学）と一緒に、Thomas Donaldson & Thomas Dunfee『Ties that Bind』などの精読にチャレンジしていました。当時は企業不祥事が多く取り上げられるようになり、高先生は不祥事を起こしてしまった企業の特別調査委員会に入られることが度々ありました。精力的なご研究、授業、学内業務に加えての特別調査委員会ですから、多忙を極められていた

と思います。その頃の高先生の研究室は入口の奥に大きな窓があり、その窓に向けてデスクが置かれていました。そのため入口ドアのガラス越しから、高先生がデスクに向かう背中が見えます。高先生にご相談がある際に「今はやめておこうかな」と、ドアをノックするタイミングをはかったゼミ生は、私だけではなかったと思います。というのも、こちらの世界に引き戻すのが申し訳ない気がするほど、原稿や資料に全身全霊で入り込み集中しきっている背中なのです。常にご自身を追い込み仕事に邁進するその背中を今も思い出します。

また、ビジネスの現場を良い方向へ変えていこうとする方々への視線は大変あたたかいものがあります。数年前に調査に入った現場で、私の研究を助けてくださった企業の方がいらっしゃいます。その方は10年以上前にサプライチェーンで抱える課題を小さくするため、自社だけでなく業界を横断して役立つツールを開発しようと尽力なさっていました。その方がツール開発時に高先生にご相談に伺った際、親身になってアドバイスをいただいたことに深く感謝していること、そして私の研究をサポートすることが、高先生への恩返しになると思っておられることを教えてくださいました。高先生からのご恩が送られたことを感じました。高先生はより良いビジネスを実現するために実践的にチャレンジし続けている研究者ですが、現場でひたむきに取り組んでいる方々を真摯に支援なさってもきたのだと思います。

そして、思い出深い言葉を、博士課程3年目の夏頃に高先生にかけていただきました。その頃の私は、思うように進まない博士論文を抱えていました。麗澤大学大学院は学生の顔がわかる小規模なサイズで、研究分野を越えて先生方が一人ひとりの院生を応援する雰囲気があります。今思い返すと先生方は「たくさん勉強して力を蓄えなさいよ」と思っていてくださっていましたし、高先生は私が失敗を通じて成長するのを辛抱強く待っていてくださっていました。しかし、焦っていたためか、先生方のご指導に答えられず在籍期間を延長させた自分を不甲斐なく思い落ち込みました。その時に「飛躍のための後退」という言葉を教えてくださいました。アーサー・ケストラー著『機械の中の幽霊』に記されている理論で、あらゆる創造的行為はある時点で初期に近い状態に戻り、改めて展開していくという考え方です。「書いては

消しを繰り返し、博士論文が進んでいないと思っているかもしれないが、これは進んでいるプロセスなのだよ」と、寄り添って勇気づけてくださいました。この言葉の理論的価値はさることながら個人的な意味が加わり、今や心の拠り所です。私自身が大学に職を得てからは、学生に向き合う中でこの言葉を伝えていきます。

最後に、高先生は覚えていらっしゃらないかもしれませんが、私にとっては思い出深い会話を記したいと思います。高先生は論文のアイデアを夢でも見られるため、博士論文執筆当時に「夢で博士論文の次の展開を見ないか?」と聞かれ、私は「博士論文の悪夢なら見ます」と答えました。また、明るくてキュートでとても美味しいお料理を沢山作ってくださる奥様が「留学前は英語で寝言を言うようになった」とおっしゃっていました。まさに、寝ても覚めても勉強・研究です。今もアイデアを夢で見られているのだと思います。

全てに対して真摯に誠実に向き合う、心から信頼し尊敬する先生がいつもの場所にいらっしゃると感じられたことが、私にとっての安心だったのだと思います。高先生は博士課程を修了した時から、独立した研究者として扱ってくださいますが、私の中ではようやく今、自立の時を迎えたようです。次の世代のために良い仕事をしていきたいと思います。高先生、本当にありがとうございました。

#### 高巖先生への謝辞

高崎商科大学商学部 田中 敬幸

高先生のご退職あたり、麗澤大学を離れた私にも論文と謝辞を執筆する機会をいただいたことにまず感謝したいです。私にとって先生は、研究に厳格な師であり、父のような存在であり、憧れであり、背中を追いかける尊敬する方です。先生には、学部生、大学院生、ポストドクターとしてご指導いただき、13年という長い時間を麗澤大学と一緒に過ごさせていただきました。同じ組織で働き、仕事についても直接ご指導やアドバイスをいただきましたかったというのは、少し甘え過ぎかもしれませんが、自分のキャリアの中で実現したかったことの1つです。

楽しかった思い出、辛かった時にお支えいただいたことなど、学恩だけでなく綴りたいことが本当に

たくさんありますが、謝辞の趣旨からなるべく脱線しないように書こうと思います。

2001年、私が大学1年生の時の基礎ゼミナールの担当教員が高先生でした。20年以上も前のことです。先生の授業を通して企業倫理という分野があることを知り、もっと深く知りたくて、研究室を訪ねるようになりました。3年生になると大学院へ進学することを勧めていただきました。特別優秀な学生ではなかったと思いますが、学問に対する熱意みたいなものを感じ取ってくださったのではと思います。その頃から修士課程の英語の文献を読む授業に参加させていただきました。そこで、院生に求められる英語力の高さを痛感し、必死に勉強しました。先生からすると、当時の私の英語力は、研究者に求められるレベルに全然到達していないということを知ってもらいたかったのだと思います。

大学院では、研究指導が本格化し、卒業論文の指導では優しかった高先生がとても厳しくなりました。厳しいというのは、怖いか恐ろしいという意味ではなく、要求するレベルが高いということです。それは、院生に対する期待であり、その先にある就職活動、そして研究者として生きていくために必要な水準を見越してのことであったように思います（今その水準にあるのか、と考えると大いに不安ですが）。

ポストドクター時代には、就職のことで大変ご心配をおかけしました。先生の「きちんと評価してくれる人はいる」との言葉のおかげで、気持ちを切らさずに就職活動を続けられたのだと思います。なんとかポストドクターの2年目が終わるギリギリのタイミングで高崎商科大学への就職が決まった際には、本当に喜んでいただきました。

就職してからも研究や仕事のことで相談をさせていただいています。いつまでも手のかかる学生で申し訳ありません。先生は常に、先を見据えて努力を続け、研究成果を出すことの重要性について説いてくださいました。その言葉を胸にこれからも研究を続けていきたいと思っています。まだまだお世話になることがあるかと思っています。高先生、これからもご指導のほどよろしくお願い致します。

高巖先生から受け取ったもの

麗澤大学国際学部 藤野 真也

私が高先生に初めてお会いしたのは、2011年に、京都大学経営管理大学院の夏の集中講義で「ビジネスエシックス」を受講したときでした。当時は、長引くリーマンショックの影響で日本経済が停滞するなか、オリンパスによる巨額の粉飾決算を皮切りに、いくつかの企業不祥事が立て続けに明るみ出て、日本の産業界に対する社会の不信感が募っていたように思います。

その頃、MBAの学生だった私は、大学院で会計やコーポレートファイナンスを学び、夜や週末はアルバイトに精を出す毎日を過ごしていましたが、必死になって経済社会のルールを学んだところで、一部の企業やその関係者がルールを無視し、その結果として経済全体が危機にさらされるのを目の当たりにして、ある種の無力感を感じていました。それでも、当時の京大MBAには、良い意味でも悪い意味でも勢いのある学生が多く、自らの市場価値を高めるために、日夜勉強に励む学生たちが集まっていたのですが、私は、そうした価値観にも染まりきることができず、卒業後の方向性を決めかねていました。

そうした折に受講したのが、ビジネスエシックスの講義でした。リーマンショック後の日本社会では、利益追求型の経営思想が行き詰まりつつあることに、多くの人々が気づき始めていたと思いますが、SDGsやESGといった、明確な方向性をもたらすキーワードや枠組みは、未だ生まれていませんでした。しかし、そんななかで高先生の講義は、新たな社会のあるべき姿を明確に示し、それを実現すべく、ご自身がそこに飛び込んで日々奮闘しておられることを、実感させるものでした。私は、これまで自分が勉強してきた経営学や会計学の知識を、ビジネスエシックスという分野であれば存分に活かせると確信し、高先生のもとで博士研究をすべく、麗澤大学大学院への進学を決めました。

麗澤大学大学院で、企業倫理の研究を通じて高先生から学んだことはあまりに多く、それをここで十分に述べることはできません。またそれは、私の博士論文の謝辞にて述べさせていただいたので、ここではあえて触れないことにいたします。むしろ、博士課程を修了し、研究者として独り立ちした今となって初めて気づくのは、私が高先生からいただいたのは研究指導だけでなく、高先生のもとでともに学んできた先輩方や後輩たちという仲間との関係であ

り、また、大学の外で高先生と志を同じくする多くの人々とのつながりであったことです。

高先生は麗澤大学をご退職後も、精力的に研究・実務に邁進されると思いますし、その姿は、私にとつての憧れであり続けると思います。しかし、これからの私は、そのような先生の姿に近づいていくというよりも、むしろ先生から受け取ったものを糧にしながら、自分らしさを追求していかねばならないと感じています。現実の社会は、これまで高先生の思い描いてきた姿に少しずつ近づいているように思いますが、新しい産業構造のなかで、これまでは想像もできなかった問題も生み出されています。そうした問題を自分の目で見つめ、それを克服する社会の姿を描いていきたいと思います。

## 高先生との思い出と感謝の言葉

就実大学経営学部 大塚 祐一

高先生に初めてお会いしたのは、2003年4月のことである。初年次教育のゼミのクラス担当が偶然にも高先生であったわけだが、この幸運とも呼ぶべき偶然が、その後の私の人生を大きく変えていった。しかし、高先生から見た私の第一印象は、全く良いものではなかったようである。当然であろう。お世辞にも真面目な大学生とは言えなかった当時の私は、髪の毛を明るく染め、ズボンに腰の位置まで下ろすいわゆる腰パンスタイルを決め込んでいたのだ(笑)。そんな奴が私一人であれば良かったのだが、同じような髪の色をした友人連中が教室の後ろに陣取り、高先生のゼミに参加するものだから、その印象は最悪であったことだろう。高先生は、その後、事あるごとに「私が30歳を過ぎてもお—研究室の先輩や後輩に当時の私の印象を面白おかしく話してくださるのだが、その度に私は顔を赤くして恥ずかしさと申し訳なさでいっぱいになる。高先生は、私の結婚式のスピーチでも、言わばテッパンとなったこの話をされ盛り上げてくださった。

大学入学当初は、教室の一番後ろに座ってゼミに参加していた私だが、数ヵ月後には一番前の席が私の特等席となっていた。高先生のお人柄、そしてゼミで教えてもらった企業倫理やCSRの話に徐々に惹かれていったのである。私が大学に入学した2003年は、日本企業による不祥事が相次いで表面化し、

まさにCSRに関する社会的関心が急速に高まっていった時期であったが、同分野の第一人者である高先生からの教えは目から鱗の連続であった。とりわけ、利益を最大化する方法を学ぶのが経営学だと思っていた18歳の私にとって、「21世紀においては、どれだけ儲けたかという結果のみならず、どのように儲けたかというプロセスが大事になってくる」と教えてくださったことは今でも強く印象に残っている。

先程、高先生のお人柄に惹かれと書かせていただいたが、大学生だった当時の私にとって高先生の印象は、(1)講義が分かりやすく、難しい話もかみ砕いて説明して下さる先生、(2)企業や国の仕事もされていて、何やらもの凄いい先生、(3)授業中に独自のセンスで何度も笑わせてくれる先生、(4)女子学生から人気のある先生、(5)笑顔が素敵な優しい先生、といったものだった。(1)(2)(5)については、私などがあえて言うまでもなく、周知の通りであろう。(3)については、すぐにでも思い出せるものが少なくとも6つあるが、これについては高先生に次回お会いする際の思い出話として取っておくことにしたい。

さて(4)についてだが、こんなエピソードがある。確か私が大学3年生だった頃の話だが、友人グループで食事をしていた時に、ふと理想の旦那像の話になった。男としては、ぜひ女子の意見を真剣に聞いておこうと思ひ耳を傾けると、最初に「高先生みたいな人がいい!」と言い出した女子がいた。すると、「あー、分かる!」と次々に女子たちが共感し始めたのだ。すかさず理由を尋ねると「高先生は絶対奥さんに優しいから」「授業中に奥さんの話をする時の高先生の顔が優しいから」というものだった。高先生は授業の際、たまに奥様の話をされる。若かった頃のお話、ディズニーランドに行かれたお話、旅行に行かれたお話など、すぐに挙がるものだけでもこれだけある。もちろん単なる雑談ではなく、いずれも授業の内容に関係するものである。高先生の人気は女子学生に限った話ではない。とある企業の担当者から聞いた話だが、その会社には高先生ファンの女性社員が多いという。ちなみに、麗澤大学の元職員である私の妻も高先生のファンの一人である。理由は「優しくて誠実な先生だから」だそうだ。

高先生の好きな言葉は「妥協のないインテグリティ（誠実さ）」であるが、私は高先生ほど誠実な人を知らない。学部を卒業し、高先生のご指導のもとで大学院時代を過ごす中、研究者としてのあるべき姿はもちろんのこと、もっと広く人としてのあるべき姿を教えていただいた。その教えは、時に直接的なお言葉によって説いていただくこともあったが、多くは高先生ご自身の姿勢や実践を通じて説いてくださったように思う。

そんな高先生に少しでも近づきたいと思った私は、専任教員として職を得た3年前から、2つの事を実践している。1つ目は、かなり浅はかではあるが、高先生のマネをすることである。まずは形からということで、誠に勝手ながら実に多くのことをマネさせていただいている。その全てを述べるのは相当恥ずかしいので1つだけ書かせていただくと、研究室を常に整理整頓することである。高先生の研究室は、いつも伺いしても常に整理整頓されている。研究室が散らかっている方が何となく研究者っぽいのが、高先生にならって可能な限り整理整頓を心掛けている。そんな中、去年こんなことがあった。同僚の教員が私の研究室にやって来て、帰り際に「先生の研究室はいつもきれいですね」と言われたのである。私は「師匠がこうなので僕もそうしているんです」と誇らしげに答えた。全くの見当違いではあるが、高先生に少しだけ近づけた気分になれた。

2つ目は、新年に手帳を新調した際、新しい手帳の最初のページに「行動指針」として「高先生ならどう判断し、どう行動するかという視点で考えよ」という文言を記すことにしている。これは、日々の行動指針というよりは、何かに行き詰まったり自分自身に言い訳をして楽な方に進みそうになった時に、自戒の意味を込めて確認するものである。昨年、学務やその他の仕事が重なり、なかなか研究が進まない時期があった。忙しさを理由に研究の時間を割くことを諦めかけていた時に、「高先生ならどうするかという視点で考えよ」という行動指針を思い出した。導き出した答えは「高先生であれば、他の業務が忙しいことを理由にして、決して研究の歩みを止めたりはしない」であった。博士課程を修了した後、高先生から直接的にご指導いただく機会は少なくなりましたが、実際には今でもこのように高先生にご指導いただいている。この行動指針にお世話に

なったのは、1度や2度ではない。また研究という側面のみならず、教育の場面や学外関係者と仕事をする上で、幾度となくこの行動指針を通じて「高先生ならどう判断するか」と問い、私の心の中で高先生と対話をし、ご指導いただいている。最後に行き着くのは、やはり高先生が最も好きな言葉である「インテグリティ」なのである。

高先生、大学1年生の頃から今まで本当ににお世話になりました。特に博士課程の6年間、なかなかテーマを絞り切ることができず、研究が思うように進まなかった私を、常に優しく辛抱強くご指導いただき、本当にありがとうございました。将来を焦り、5年で学位を取りたいと思っていた私に対し「もう1年じっくり腰を据えて、より良い論文に仕上げてください」と仰っていただいた際には、落胆の気持ちもありましたが、今思えば6年目となる最後の1年なしに今の私はないと思っています。それほど大切な1年でした。最後になりますが、本当に本当にありがとうございました。そして、これからも引き続きよろしく願いいたします！

高先生の言葉：Uncompromising Integrity が生み出す説得力

麗澤大学大学院経済研究科ポスト・ドクター  
藤原 達也

2005年の学部生時代に高先生のゼミに入ってから、私は企業倫理の研究者を志すようになり、ポスト・ドクターの期間を終えようとする現在に至るまで、高先生から多くのご支援を賜りました。しかし、紙面に限りもあるため、その一つ一つのエピソードを取り上げることはできません。そこで、ここでは、高先生から頂いた3つの言葉を通じて、高先生に感謝の意を示したいと思います。それらの言葉は、これまでの私の人生を支えてきてくれたものであり、また、これからの人生も支えてくれるものであると確信しているからです。私の人生を通じて影響力を及ぼすという点を踏まえれば、いずれかのエピソードを取り上げるよりも、これが合理的な方法だと考えます。

第1は、「社会には、考えている人は多くいるが、行動に移せている人は少ない。社会で評価されるのは、ほとんどの場合、後者の人たちである」という

言葉です。これは、私が学部の3年生の時に、高先生がゼミの送別会で4年生に贈った言葉です。その日から、この言葉は、私の人生の道標となってくれました。重要な決断を迫られた時は、この言葉を思い出し、前に進むことができました。民間会社を辞めて研究者の道を歩むために大学院に戻る時、また、イスラームという自身の全く知らない世界に飛び込み、マレーシアでの調査研究を決心した時、この言葉が私の支えになってくれました。この先の人生においても、この言葉が私の原動力となってくれることに変わりはありません。

第2は、「企業倫理を研究することは、自分自身を律することである」という言葉です。大学院では、谷川セミナーハウスでの合宿が恒例となっていました。そこで、私は、ある粗相をしてしまいました。その場に高先生はいらっしゃらなかったのですが、後日、私は、その件について高先生に報告をしました。その時に、高先生から頂いた言葉です。それまでの私は、研究者としての自分を私生活の自分と切り離して考えていました。しかし、この言葉を聞いて、特に企業倫理という分野を研究する以上、両者は一体でなければならないと気付かされました。現在、私は、非常勤講師として、企業倫理に関する科目を担当しています。また、企業倫理以外の科目でも、そのエッセンスを取り入れながら、学生たちに教えています。その中で、当為の問題を扱う以上、学生に教えたことについて、私自身が一貫性ある行動をとっていかなければいけません。研究者として、また、教育者として、その姿勢が揺らぐようなことがあれば、この言葉が私を正しい道に導いてくれます。

第3は、「やれることは全てやったと考える。そして、その結果が駄目だったとしても、それも運命として受け入れる」という言葉です。博士論文の執筆が最終局面を迎える中で、生活費の工面や小さかった長男の育児など様々なことが重なり、私は、自暴自棄になりかけていました。そんな時、この言葉は、私が高先生に「どのように困難を乗り越えてきたのですか？」と質問した際の返答でした。私は、「諦めるな！」「強くあれ！」というような言葉を

予想していたのですが、その返答は、全く違うものでした。「高先生もこのように考えるのか」と驚いたことを、今でも、はっきりと覚えています。この言葉には、「自分を駄目にするのは、結局のところ、自分である」という意味が込められていると思います。自身を取り巻く環境には、自分ではコントロールできないことが多数あります。それらの影響を受けることは間違いないですが、最終的に「自分がどうあるべきか」を決めるのは自分であり、環境に委ねてはいけないということを教えてくれたのだと感じています。高先生の言葉は、自分自身を見つめ直すきっかけとなりました。そして、自身の考えを改めることで、無事に博士過程を修了することができ、また、ポスト・ドクターの2年間も乗り越えることができました。今では、新しい家族も増え、これから新しい生活も始まろうとしています。そのような中で、この言葉が必ず困難を乗り越える力を与えてくれるでしょう。

好きな名言や格言は多くありますが、それらを残した人々を思い浮かべてみると、私が実際にお会いしたことのある人は高先生ただ一人だったことに気付きました。「何故、高先生の言葉は心に響くのか」を考えてみると、それは、高先生が「妥協のない誠実さ」(Uncompromising Integrity)をもって、私たちと接してきてくれたからだと思います。そのような高先生の姿勢が言葉の説得力を生み出し、私の考えや行動を変え、私の人生を良き方向へと導いてくれたのだと考えています。

最後に、名言や格言ではないですが、私の心に残っているもので、祖父の言葉があります。私がまだ小学校低学年の時でした。その経緯は覚えていませんが、祖父に「世の中の役に立つような仕事をしなさい」と言われたのを鮮明に覚えています。当時の私は、この言葉の意味をしっかりと理解できませんでしたが、今では、企業倫理の研究と教育という形で、祖父の言葉を実現できるような道を歩んでいます。そのことを不思議に思うと同時に誇りに感じています。そして、これから先も、同じ道を歩んでいくことに変わりはないでしょう。その道に導いてくれた高先生に、心より感謝申し上げます。